

## 令和 2 年度病害虫発生予察特殊報第 5 号

令和 3 年 1 月 18 日  
静岡県病害虫防除所長

- 1 病害虫名 病名：セルリー萎縮炭疽病  
病原菌：*Colletotrichum nymphaeae* (Passerini) Aa
- 2 発生作物 セルリー
- 3 発生経過
  - (1) 令和 2 年 10 月に県西部地域の露地セルリー圃場にて、芯葉部位に多数のえそ斑が生じ、奇形を伴う病害が発生した。
  - (2) 病斑部から分離された菌 (図 1) を静岡県農林技術研究所にて、形態、培地性状及び遺伝子解析 (ITS 領域、 $\beta$ -tubulin-2、Actin 遺伝子の塩基配列解析) を行ったところ、セルリー萎縮炭疽病であることが明らかとなった。本病は、静岡県での初めての発生である。
- 4 発生状況  
本病は長野県で 2011 年に初めて報告され、既報の *C. fiorinae* (異名 *C. acutatum*) による炭疽病とは症状が異なることから、萎縮炭疽病と命名されている。  
国内での発生は長野県に次いで 2 例目である。
- 5 病徴
  - (1) 本病は芯葉に細かいえそ斑点を多数形成し、併せて、葉が奇形となったり、葉巻(カール)する (図 2、3)。
  - (2) 収穫期に近づくと萎縮、矮化などの生育異常が顕在化してくる (図 4)。
- 6 病原菌の発生生態
  - (1) 本病は種子伝染し、罹病残渣も翌年の伝染源となる。
  - (2) 本菌はセルリー以外に、野菜ではパセリ、スイカ、イチゴ、花きではストック、果樹ではブドウ、ビワなどで病原菌として報告があるが、相互の感染は明らかになっていない。
  - (3) 本菌の菌糸生育適温は 25~30℃、発病適温が 24~28℃と比較的高温である。
- 7 防除対策
  - (1) 汚染種子が 1 次伝染源となるため、検査済の健全種子の確保に努める。また温湯消毒も効果があり、種子を 50℃の温湯に 30 分間浸漬して実施する。水温管理を厳密に行い、処理終了後は直ちに冷水で冷却を行ったのち、播種する。温湯処理済の種子は保存しない。本処理により斑点病に対する防除効果も得られる。
  - (2) 罹病残渣は翌年の伝染源となるため、作終了後及び育苗、定植前にはほ場内の残渣の片付けを行う。
  - (3) 栽培期間中に発病を確認した場合、本病は全身病徴を示すので、病斑部だけでなく

発病株を見つけ次第、ほ場外に持ち出し処分する。

- (4) 本病を対象とする登録農薬にはダコニール1000がある(表1)。予防剤であるため斑点病防除と合わせ、予防散布に努める。
- (5) 本菌は比較的高温性であることから、盛夏期に定植する作型においては特に注意し、前作で多発したほ場では、定植時期を遅らせることも検討する。

表1 セルリー萎縮炭疽病登録農薬

農薬名	希釈倍数	使用方法	使用時期	本剤の使用回数	散布液量
ダコニール1000	1000倍	散布	収穫21日前まで	2回以内	100~300L/10a

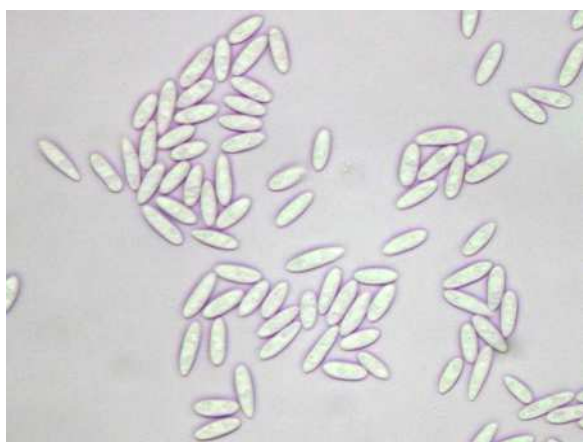


図1 セルリー萎縮炭疽病菌分生子



図2 細かいえそ斑点が多数形成され、萎縮する芯葉



図3 葉柄のえそ斑



図4 芯葉が萎縮した株